

つまり、それぞれ文化的完結性を持つている宗教的伝統の中で、元々は自分たちの伝統の中にあつて現在見失いがちになっているものへの希求が東西霊性交の根底にあり、それが継続の力となつていてと考えられる。

## 二一世紀宗教間対話の潮流

——各対話指針の比較から——

山梨 有希子

一 はじめに—TruthからCommon valuesへ—

近年の宗教間対話は、互いの教理上の対立を問題にしていた対話から、「グローバリテイ」の意識に基づいた社会にむけてどういった行動がとられるべきか、また、それにむけてどう協力していくべきかを話しあうものにシフトしつつある。これはそれまでの宗教間対話がいゆる宗教的エリートによる神学的論争に終始することが多かったことによる宗教間対話の不毛性がもたらした結果でもある。しかし私たちはその流れがここ数年の間に、また変化を見せ始めているのを目撃している。本発表では、その変化を追うとともに、そこから見えてくる「宗教間対話」の新しい課題を明らかにすることを目的としている。

二 Common values から共同体内部のつながりへ

たしかに「世界平和」などの共通善を前にして諸宗教・諸文化の間に対立は起きないであろう。しかし、それはまたあまりに大きく、漠然とした概念であるがゆえに、個々の戦争や日々

起きる隣人トラブルなどへの応用性を欠くものであった。「世界平和」といった抽象的問題ではなく、従兄弟が異宗教の人と結婚した、隣人で友人でもある異宗教徒の葬式に行きたい、異宗教徒のお祭りに呼ばれた、などの具体的かつ個別的な問題として宗教間対話は問題となつていのである。

それに答えるように、二〇〇七年にキリスト者統一委員会とアイルランド教会が出した「宗教間対話および行事に関するガイドライン」は個別の事項に関してかなり具体的な内容となつている。

また、二〇〇六年にヨーロッパ会議がフランスにて開催した会議では、ローカルレベルで行われる宗教・文化間対話における十二の原理（地方行政当局のための）なるものが明らかにされた。

これらの対話ガイドラインから伺えるのは、宗教間対話がローカルなレベルあるいは草の根レベルで広く行われるようになったということ。そして、その内容は「世界平和」のような共通善から、俗なる共同体における平等、安心における日々の暮らしのためのものに、そして、それらはグローバリテイの意識に基づくというよりも、ローカルな共同体を構成する一人としてのアイデンティティを認識する（させる）という側面がより強くなつてきているということである。

三 宗教間対話の新しい類型—Citizen dialogue between persons of different faiths

ヨーロッパ会議は、宗教間対話には次の三つの意味があるという。「Interfaith dialogue」「Citizen dialogue between per-

sons of different faiths」[Religious knowledge]である。

宗教間対話を「異なった信仰を持つ人々の間の市民対話」と位置づければその対話は究極的な対立を引き起こすことなく進むのかもしれない。それはいわば「聖」の部分、すなわち宗教的信念については個人的領域に収め「俗」なる市民としての立場で考え、事態に対処することを意味するからである。しかし、そのように厳密に区分して対処することは可能だろうか。

「世界平和」をめぐる対話では個別の事態には対処が難しいのは確かである。宗教的信念を持つ者同士が対立しがちであることも確かである。市民として対話をすれば話しやすいのも確かだろう。しかし、対立を恐れず、また対立を回避しようとせず辛抱強く他者と向き合うことが、そしてその姿勢を養うことが宗教間対話の一つの意義でもある。

### 宗教的生命倫理は可能か？

——エンゲルハートを手掛りに——

村上喜良

生命倫理学の諸問題に於いて、科学と宗教、宗教と宗教とが対立し合っており、宗教と宗教との対立の方が闘争的で根が深いと思われる。この闘争的で根が深い宗教と宗教の対立を如何に回避し、解決することが出来るのだろうか。

エンゲルハートは、この問題の解決に懸命に取り組んだ。彼

の解決策は、平和的非宗教的多元的倫理学 (peaceable secular pluralist ethics) の構築である。この倫理学は、平和、非宗教的、多元的、理性的個人の四つの要素から成っている。闘争よりは平和に共存することを倫理学の第一目的とすること。理性的な理由付けのない宗教的な教義を普遍化して押し付けないうこと。理性的正当化の極限を超える事柄に関しては互いに寛容であること。この倫理学を支える主体は、共同体ではなく、あくまでも理性的決断をする個人であること。このような平和的非宗教的多元的倫理学を基に、現在の生命倫理学の第一原理である自律の尊重が生まれてきたと推測される。そして、この自律尊重原理は、目下のところ、世界的に受け入れられている。しかし、問題はないのだろうか。

平和的非宗教的多元的倫理学は、理性的個人に倫理的判断の主体を制限する以上、宗教的信条相互の個人的次元での闘争を回避出来るかもしれないが、信仰共同体相互の闘争を回避できるものではないだろう。また、人間存在そのものに関わるような教義上の形而上学的な闘争を回避することは出来ないだろう。

そもそもエンゲルハートの提出した宗教間闘争の解消策は、生命倫理学の諸問題の解決を脱宗教化しただけである。これでは、信仰する者に、生命倫理学の諸問題の解決に当たって信仰的に考えることを極力押さえるように要請している様なものであり、誇張して言えば、生命倫理学の問題解決に於いては信仰を捨てろと言っている様なものである。むしろ生命倫理学の問題解決に於いては、脱宗教化的思考ではなく根源的な宗教化的